

# 児童対象の交通安全教育に伴う保護者の意識変容

Indirect Effects of Parents' Participation in Road-Safety Training for Children on Their Attitude

大谷 亮\*<sup>1</sup> 橋本 博\*<sup>2</sup> 岡田 和未\*<sup>2</sup> 小林 隆\*<sup>2</sup> 岡野 玲子\*<sup>2</sup>  
Akira OHTANI Hiroshi HASHIMOTO Kazumi OKADA Takashi KOBAYASHI Reiko OKANO

## Abstract

This article describes the indirect effects of children's road-crossing training on their parents' attitude toward road safety. Parents trained their primary school children to stop at the curb, look right and left, and not to run on roads in school grounds. The parents responded to a questionnaire on their attitude toward road-crossing behaviors before and after the children's training. The questionnaire result suggested that parents' attitudes toward their road-crossing behavior changed with their children's training on road crossing. Indirect effects of participating in road-safety training for children were discussed.

## 1. はじめに

日本の歩行中の交通事故を概観すると、15歳以下の子どもが第一当事者となる割合が高く<sup>1)</sup>、さらなる交通事故の低減のためには、子どもを対象にした安全対策が重要となる。また、子どもは将来のドライバ候補であり、一旦停止して安全確認するといった基本的な交通行動や安全態度の育成を図るには、幼少期からの継続的な安全教育が必要になる<sup>2)</sup>。基本的な交通行動は、危険感受性能力の育成と知覚-運動学習により習得されるものであり、日常からの持続的な訓練が重要である。しかしながら、日本の学校の状況を概観すると、持続的な訓練が困難な場合が多く、これを可能にする枠組みを構築することが課題となっている。

米国では、子どもの道路の横断を保護する Crossing Guard と呼ばれる人たちが、AAA (American Automobile Association) が発行する道路の適切な横断方法に関する資料に基づき、日常からの訓練を実施した事例が見られる。この Crossing Guard による日常からの訓練により、

子どもの横断時の行動が適切に変容することが示されている<sup>3)</sup>。また、英国では、ボランティア（主に保護者）が実際の道路上での訓練を実施する取り組みが実施されており、子どもの交通事故の低減に寄与している<sup>4)</sup>。

以上のような枠組みは、子どもの適切な安全態度や行動の習得だけではなく、訓練を担当するボランティアなどの安全に関する意識を適切に変容させるといった副次的な効果が期待される。すなわち、訓練の場に参加することで、子どもに教えるための知識の習得の機会が増加し、教育を担当することによる自覚の芽生えが、適切な安全意識の醸成に繋がると考えられる。教える体験を通して、教育担当者自身の態度や行動が変容する事例は、高学年が教師役となって低学年に適切な道路の横断方法を教える小学生向けの交通安全教育においても示されている<sup>5)</sup>。

本研究では、低学年児童の保護者を対象にして、自らの子どもの横断行動の訓練に参加することで、保護者自身の行動に関する意識が変容するかどうかを把握することを目的とした。

## 2. 実施方法

小学校1年生と2年生を対象にした交通安全教

\*1 一般財団法人日本自動車研究所 安全研究部 博士(心理学)

\*2 一般財団法人日本自動車研究所 安全研究部

育の中で、保護者が自らの子どもに適切な道路の横断方法について訓練するようにした。

## 2. 1 保護者対象の事前講習会

一定の知識をもって、自らの子どもに適切な道路の横断方法を訓練することができるように、保護者を対象にした事前講習会を実施した。事前講習会は、保護者の負担を最小限にして、参加者数を増やすために、児童の訓練の30分前に実施した。事前講習会では、①子どもの交通事故の特徴、②子どもへの接し方、③横断行動に関する具体的な教え方などに関する内容を保護者に対して解説した。①では、子どもが第一当事者となる事故では飛び出しが多いことや、他者と一緒にいるときに事故が多いこと、②では、最初に児童の横断行動を観察した後に、良い点を褒め不適切な点を指摘すること、児童の意見を聴くこと（傾聴）、さらには、児童自らが適切な横断方法を習得するためのサポート役に徹することを保護者に伝えた。また、③では、実際に児童に訓練する箇所において、急がず、飛び出さないことや確認行動の意味（確認とは、首を左右に振ることではなく、車がないことを知ること）、さらには、確認するための適切な位置について保護者が理解できるようにした。以上の内容は、各保護者に事前に配布した教育担当者用のマニュアルに基づいて説明し、実際の訓練の際にもこのマニュアルを使用するように保護者に求めた。

## 2. 2 児童の横断行動の訓練

保護者への講習会の後、各学年毎に45分間（小学校の1時限分）で適切な道路の横断方法に関する訓練を実施した。訓練は、駐車車両により見通しが悪くなっている道路（Fig. 1）を4箇所模擬し、児童一人一人が道路を横断した後に、保護者が適切な点を褒め、不適切な点を修正する行動修正法に基づいて実施した。また、駐車車両が原因で見通しが悪くなっている箇所には、車のボード（絵）を配置し、児童が確認のために最も適切な位置を学習できるようにした。

児童を対象にした訓練には、1年生49名と2年生57名が参加し、1年生保護者42名、2年生保護者29名が訓練を担当した。なお、当日保護者が参加できなかった児童に対しては、別の保護者に訓練をお願いした。また、見通しの悪い交差点の各箇所には専門家1名を配置し、保護者による訓練の補助

を行った。

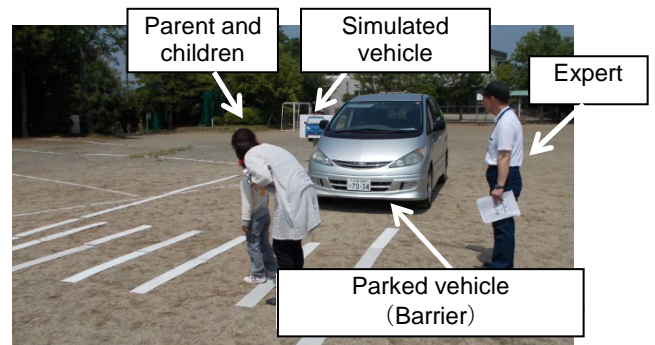


Fig. 1 Training for children by parents

## 2. 3 保護者対象のアンケート調査

児童の安全教育、実施した教育、さらには、道路横断行動に関する保護者自身の知識や意識の変容を把握するため、16項目からなるアンケート調査を実施した。調査は、保護者対象の事前学習の前と、児童対象の横断行動の訓練後に実施した。本稿では、16項目の質問の内、歩行および運転時の保護者の行動に関する意識を把握するために設けた選択回答形式の2項目について記す。歩行時および運転時の行動に関する保護者の意識を把握するため、見通しの悪い交差点の右方向の写真を示し、質問内容と選択肢を調査者が説明した後に、保護者に回答を求めた。歩行時の行動に関する質問は、直線単路を横断歩道に従って歩行するときに、右方向に駐車車両が存在した場合（Fig. 2 (a)）の横断方法について質問した。選択肢は、「走って横断する」、「右を確認したので、左を確認して走って横断する」、「左を見て再度右を見て走って横断する」、「歩いて横断する」、「右を確認したので、左を確認して歩いて横断する」、「左を見て再度右を見て歩いて横断する」の6通りとした。また、運転時の行動に関する質問は、見通しの悪い交差点を通過するときに、右方向に遮蔽物が存在した場合（Fig. 2 (b)）の横断方法について質問した。選択肢は、「そのまま走行する」、「右を確認したので、左を確認してそのまま走行する」、「左を見て再度右を見てそのまま走行する」、「徐行して走行する」、「右を確認したので、左を確認して徐行して走行する」、「左を見て再度右を見て徐行して走行する」の6通りとした。

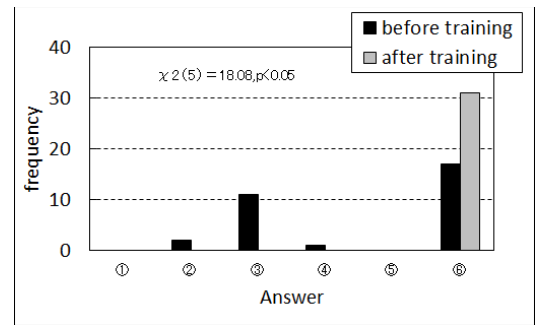


(a) Pedestrian crossing scene

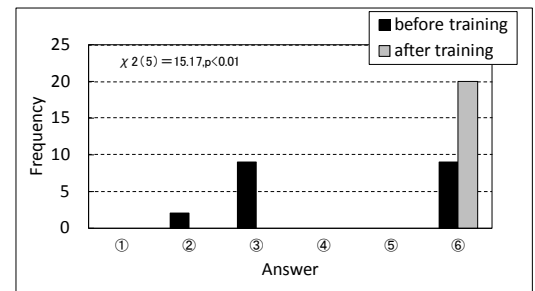


(b) Driver crossing scene

Fig. 2 Photos shown in questionnaire



(a) 1st grade school children's parents



(b) 2nd grade school children's parents

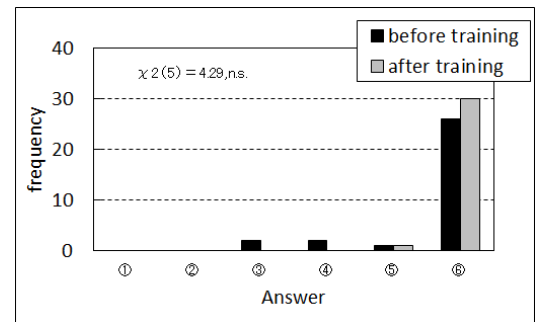
- ①Running, ②Running with left looking, ③Running with left and right looking, ④Walking, ⑤Walking with left looking, ⑥ Walking with left and right looking

Fig. 3 Results of pedestrian crossing scene

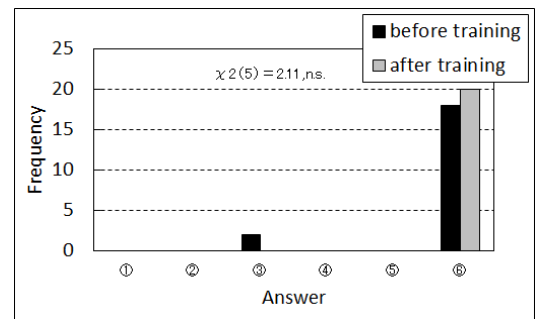
### 3. アンケート調査結果

歩行時および運転時の行動に関する意識についての質問項目の結果を、1年生と2年生の保護者別に、訓練前後に分けて集計した。

訓練前後の歩行時の行動に関する意識についての回答結果を集計したところ、両学年の保護者とも、訓練前では、「左右を確認して走って横断する」との回答が半数以上見られたが、訓練後は全ての保護者が、「左右を確認して歩いて横断する」との意見に変化し、有意差が見られた（1年生保護者、 $\chi^2(5) = 18.08, p < 0.05$ , Fig. 3 (a) ; 2年生保護者、 $\chi^2(5) = 15.17, p < 0.01$ , Fig. 3 (b)）。次に、運転時の行動に関する意識についての保護者の回答結果を集計したところ、訓練前後とも、「左右を確認して徐行して走行する」の回答が多く、訓練前後に有意差は見られなかった（1年生保護者、 $\chi^2(5) = 4.29, n.s.$ , Fig. 4 (a) ; 2年生保護者、 $\chi^2(5) = 2.11, n.s.$ , Fig. 4 (b)）。



(a) 1st grade school children's parents



(b) 2nd grade school children's parents

- ① Drive, ② Drive with left looking, ③ Drive with left and right looking, ④ Slow down, ⑤ Slow down with left looking, ⑥ Slow down with left and right looking

Fig. 4 Results of driving scene

#### 4. 考察

本研究では、道路の横断方法に関する小学校内での子どもの訓練に参加することで、保護者の横断行動についての意識がどのように変容するかを調査した。訓練前後のアンケート調査の結果、運転時の行動に関する保護者の意識に大きな変化は認められなかった。これは、訓練前から「見通しの悪い交差点では左右を確認して徐行して走行する」との回答が多く、天井効果が見られた結果と解釈できる。一方、歩行時の横断行動に関する結果は、訓練前では、「左右を確認して走って横断」との回答が多かったが、訓練後では、「左右を確認して歩いて横断」の意見が増加し、訓練前後の意識に有意差が見られた。子どもに適切な道路の横断方法を教えるための保護者対象の事前講習会や実際に子どもの訓練を担当することで、飛び出しの危険性などについての理解が促進されたため、歩行時の横断行動に関する保護者の意識が変容したと推察される。特に、保護者向けの事前講習会では、走って横断することで、視野狭窄になり易いことや見通しの悪い箇所に車が存在した場合に衝突回避の対応行動が困難になることを伝達したが、これが保護者の知識を改善させ、意識の変化を促したと考えられる。以上の結果から、子どもを対象にした適切な道路の横断方法に関する訓練に保護者が参加することにより、保護者自身の歩行時の横断行動に関する意識が変容するといった間接的な効果が期待できると考えられる。

しかしながら、本研究では、アンケート調査により保護者の意識の変容を把握したのみであり、実路上での実際の横断行動の変化については把握していない。今後、子どもの交通安全教育に参加することによる保護者自身の実際の横断や運転行動の変化について検討する必要がある。また、保護者から訓練を受けた子どもの態度や行動が変化するか否かについても調査することが重要である。さらに、日常生活の中で子どもと道路を横断する際に、保護者が実際に適切な道路の横断方法を訓練できるか否かといった実際の訓練の状況について把握することが、日常からの訓練による知覚－運動学習の推進を図る上で必須となる。

本研究で対象とした小学校は通学路が長いため、交通事故の危険性に対する地域の関心が高く、安全教育への理解も良好である。この点から、子どもの安全教育への保護者の参加も比較的多かったと推

察される。今後、交通安全に対する関心が薄い他地域への普及促進の可能性についても把握することが重要である。また、1年生の保護者よりも、2年生の保護者の参加が相対的に低かった。これは、子どもが成長するとともに、子どもの交通事故のリスクに対する保護者の認識や親子関係の変化が反映された結果と考えられる。したがって、多くの保護者が負担なく子どもの交通安全教育に参加できる機会を探索することによって、保護者主体の安全教育の取り組みを可能にする枠組みを構築していくことが望まれる。

**謝辞**：本研究は、平成25年度公益財団法人タカタ財団助成研究の一部をまとめたものであり、ここに記して感謝申し上げます。また、本研究の実施に際し、つくば洞峰学園つくば市立小野川小学校（前、宮本好弘校長、現、栗山忠校長）より多大なご協力を頂きました。深く感謝申し上げます。さらに、本研究に記した取組みの実施に際して、つくば市環境生活部危機管理課、茨城県生活環境部生活文化課、茨城県警察本部交通部交通企画課、茨城県警察つくば中央署より様々なご助言を頂きました。あわせてお礼申し上げます。

#### 参考文献

- 1) (財)交通事故総合分析センター：交通統計 平成22年版(2011)
- 2) 大谷亮ほか：児童の交通安全のための実践的・継続的手法とその効果－横断行動の認識を促進させるアプローチ、交通心理学研究, Vol.28 (1), p8-21 (2012)
- 3) Yeaton, W.H., & Bailey, J.S : Teaching pedestrian safety skills to young children : An analysis and one-year followup, Journal of applied behavior analysis, Vol.11, p315-329 (1978)
- 4) Whelan, K., et al : Evaluation of the national child pedestrian training pilot projects. Department for Transport. Road Safety Research Report No.82 (2008)
- 5) 大谷亮ほか：児童の交通安全のための実践的・継続的手法とその効果 (2)－有効かつ効率的な教育実施に関する検討一、日本交通心理学会第78回大会発表論文集, p39-42 (2013).